

国立市立国立第四小学校（2年目）

【校長】 牧野 陽一郎
【生徒数】 294 名
【学級数】 12 学級



次の取組へ

【課題・改善】

- ・授業研究より
言葉掛けの精緻化
言葉掛けを一つの手立てとして研究してきたが、抽象的表現を避け直感的なオノマトペや共有可能な共通言語の構築が課題である。
- ・児童アンケートより
「給食をバランスよく食べようとしている」
回答 77.9%（目標 80%）
→1 学期より肯定的に答える児童が減少した。
食育指導を含め保健教育を更に改善する必要がある。
「運動やスポーツをすることは好き」
回答 91.7%（目標 95%）
→否定的な児童に着目し、否定的な児童でも触れやすい運動を行うことができるよう、より一層の環境整備を見直す必要がある。

目標

- ・体力テスト意識調査において、「運動やスポーツをすることは好き」と答える児童 95%以上
- ・校内アンケートにおいて、「給食をバランスよく食べようとしている」と答える児童 80%以上
- ・校内アンケートにおいて、「自分からすすんで外に出て遊んでいる」と答える児童 80%以上

【成果】

- ・「運動やスポーツをすることは好き」
回答 91.7%（目標 95%）⇒概ね達成
 - ・「自分からすすんで外に出て遊んでいる」
回答 85%（目標 80%）⇒ 達成
 - ・「体育の学習で、めあての達成に向けて、取り組み方を考えながら運動することができている」
回答 88.5%（1 学期 81.5%）⇒ 向上
 - ・「体育の学習の終わりに、学習したことをふりかえることはできている」
回答 84.1%（1 学期 73.3%）⇒ 向上
 - ・「体育の学習で、自分の意見を友だちにつたえることができる」
回答 73.1%（1 学期 67.5%）⇒ 向上
- ・高い運動意欲を持続させることができた。
・授業研究により、校内全体の体育指導の授業力向上に繋がり、児童の課題解決能力の定着を図ることができた。
・環境整備により、児童の運動意欲を高め、運動の日常化に繋げることができた。

【実態・課題】

1 学期調査より

- ・「自分からすすんで外に出て遊んでいる」
回答 84.7%（R6 年度 69.6%より 15.1%向上）
- ・「運動やスポーツをすることは好き」
回答 91.8%（目標 95%）と概ね達成
- ・「給食をバランスよく食べようとしている。」
回答 88.4%

→一定の成果はあったが、今年度も継続させることが課題である。

【取組】

1 授業研究

- ・研究主題「課題をよりよく解決できる児童の育成～学びのサイクルを身に付けることを通して～」に向けて、年 3 回研究授業を通して、授業改善を図る。

2 体育的活動・環境整備

- （1）児童がより一層運動に関心を高めるための体育的活動の充実
 - ・「短なわ旬間」「長なわ旬間」「マラソン旬間」の実施
 - ・ハッピースマイルウィークの実施
- （2）運動の日常化につなげるための環境整備
 - ・児童への遊びの提案や環境の見直しを計画
 - ・ハピスマ実行委員（児童）による周知

【取組（詳細）】

1 授業研究

本研究は、学びのサイクル（AAR）を促す学習カード、友達と伝え合うグループ学習、教師の言葉掛けを主な手だてとし、「ハッピースマイル」を目指した生活習慣や運動の充実を通して、自己を見つめ友達と伝え合い高め合いながら、課題をよりよく解決できる児童を育成することを目指し、推進してきた。



情報をあえて絞ったシンプルな形式や ICT 端末の活用により、児童が自ら課題を見付け、AAR（見通し・行動・振り返り）サイクルに基づいた自己調整を行う活動が定着した。

単元全体を見通せる学習カードを作成したことで、児童が毎時間「めあて」を確認し、AAR のサイクルを自律的に回すことができた。4 年生の「跳び箱運動」では、その日の活動を振り返るだけでなく、カードを通じて「次の時間には何をすべきか」という具体的な見通しをもたせた。



技能レベルや体格、かかわり方を考慮した同質グループでの活動や、映像を通して話し合うことにより、互いの課題を共有し教え合う協働的な学びが深まった。

3 年生の「鉄棒運動」では、技能や思考力や体格に近い児童による 3 人組グループを構成し、共通の課題に対して相互にアドバイスしやすい環境を整えました。授業内に「困ったポイント」や「お助けポイント」を提示する時間を設け、児童同士が課題を見付け、教え合うきっかけを作った。



肯定的な励ましや、思考を促す発問により、児童が失敗を恐れず熱心に練習に取り組む良好な授業の雰囲気をつくることを意識し実践してきた。

6 年生の「マット運動」では、児童が「技能的クロームブック（ICT 資料）」を活用して課題を解決できるようになったため、教師による一方的な技能解説を減らしました。「勢いが無い」「まっすぐ回れない」といった共通の疑問が出た際、教師が即座に答えを教えるのではなく、児童同士で解決策を共有させるための発問を行った。

2 体育的活動・環境整備

運動に関心を高めるための体育的活動の充実

短なわ旬間では、ジャンピングボードを購入し体育委員会で紹介し、旬間中使用することができるようにした。ジャンピングボードを使用することで楽しみながら跳ぶ感覚を養える環境をつくった。

また、旬間後に各学年で行う短なわ大会の内容を見直した。これまでは技を指定し一律で競争していたが、大会で取り組む技を選択できるようにし表彰児童を増やすことで、児童がより主体的に短なわの技に挑戦することができるようにした。



運動の日常化につなげるための環境整備

運動を通して学校を笑顔にしようとハピスマ実行委員を結成した。ハピスマ実行委員から外遊びや運動の楽しさを伝えとともに、外遊びで使用できる用具を増やし遊び方を紹介することで、児童の運動意欲を刺激し、運動の日常化につなげることを進めてきた。

